

フィリピン映画に見る父性の諸相

恋愛ドラマを中心に

山本 博之

はじめに

2016年3月刊行の『混成アジア映画研究2015』に書いたフィリピンのスーパーヒロイン・ダルナに関する論考[山本 2016]の冒頭でフィリピンの大統領選挙に触れたとき、筆者が主に取り上げたのはグレース・ポー候補だった。論考のテーマがスーパーヒロインだったので女性候補のポーとイメージが重なったこともあるが、直接的な理由は、2015年末の時点でロドリゴ・ドゥテルテ候補は話題性はあるものの泡沫候補に過ぎないと見られていたためだ。しかし、周知の通り、2016年3月頃から支持を延ばしたドゥテルテは同年5月の大統領選挙で勝利を収め、同年6月にフィリピンの第16代大統領に就任した。市長経験はあるが国政の経験がまったくないにもかかわらず大統領になり、市長時代から私兵を雇って犯罪者を超法規的に処刑してきたと公言して憚らないドゥテルテは、大統領になっても麻薬犯罪の容疑者への超法規的な処刑を公認する発言を繰り返し、さらに米国へのストレートな物言いなどからも世界の注目を浴びている。

ドゥテルテ大統領の誕生について、フィリピン政治研究の日下渉は「家父長の鉄拳」や「家父長の道徳と秩序」の再興という表現で説明を試みている。前任のベニグノ・アキノ三世大統領は「品行正しさ」をキーワードに社会を規律化して腐敗や貧困の改善を試み、その後継候補であるマニユエル・ロハス候補は大統領選挙で「誠実な道」によって「フィリピンを品行正しき人びとに取り戻す」と語った。日下はこれに対し、法はしよせんエリートのためにすぎず、法を畏れないアウトローでないとこの国は変えられないという認識がフィリピン国民の間で受け継がれており、ドゥテルテの姿は「世直し義賊」に他ならないと見る。

義賊に関する豊かな民間伝承が大衆映画のテーマとなり、映画で義賊を演じた俳優が政治家に転身していったとする日下の議論のうち、フィリピンの映画人の多くが政界に進出している背景については劇場形

態の変化などとの関連で別の機会に検討することとして、本稿では近年のフィリピン映画における家父長のイメージについて考えてみたい。フィリピンでは、劇場で一般公開される作品のほかに、主に映画祭で上映される作品や、大学などで自主上映される作品まで含めると、毎年数多くの映画が制作されているが、本稿では2016年のフィリピン大統領選挙の選挙期間を中心に、その前後の2015年から2016年にかけてフィリピンの劇場や映画祭で上映されたり話題に上ったりした作品を中心に取り上げる¹⁾。

1. フィリピン映画における父親像

改めて考えてみるとフィリピンはまことに奇妙な国である。早くから映画産業が盛んで、これまでに数多くの映画を制作している映画大国であり、今日でも映画は大衆文化の主役としての地位を維持しているが、フィリピン映画にオリジナルな男性のスーパーヒーローはいない。フィリピンのオリジナルなスーパーヒロインにはダルナがあり、何度もリメイクされてきたことは上述の別稿で論じた通りである。フィリピンのオリジナルなスーパーヒーローとしてキャプテン・バーベルやラスティックマンなども挙げられるが、いずれの作品もダルナが客演しており、リメイクの回数も知名度もダルナにはるかに及ばない。

往年のアクション映画では、ジョセフ・エストラーダやフェルディナンド・ポー・ジュニア(FPJ)といった国民的俳優がおり、最盛期には年平均して10作近い主演映画が撮られていた。その意味でエストラーダやFPJは確かにフィリピンの国民的な英雄だとも言えるが、それは役者としてであって、彼らが演じた役が国

1) 本稿で取り上げる作品はいずれも劇場公開またはDVD視聴によって著者が直接視聴したものだが、内容紹介ではインターネット上のフィリピン映画解説サイトなども参考にしている。日本語で書かれたフィリピン映画解説サイトでとりわけ内容が充実したものに「ガラクタ風雲」の「僕が見てきたフィリピン映画」(<http://garakuta.blue.coocan.jp/denei/philippines/philippines.html>)がある。

民的な英雄であるということではない。

映画を離れてフィリピン社会における父親像について簡単に振り返るならば、300年間続いたスペイン統治時代には父とは文字通り神父のことだった。スペインにかわって米国がフィリピンの統治者となると、米国人は自分たちを父とは名乗らなかったが、物理的な強さによって支配する存在という意味では確かに父性を体現していたといえる。当時の風刺画には、米国の父親、フィリピンを子あるいは乳幼児として描くものも多く見られた。

新来かつ外来の支配者である米国は真の父親になり得なかったが、その一方でフィリピンの人々にとって米国を實力で追い払うことができないことも現実だった。フィリピン映画には父親(あるいは成人男性)の描かれ方にいくつかの類型が見られるが、これらは映画を通じた米国的な父性への抵抗として見ることもできるのではないと思われる。父たる米国またはそれを受け継いだフィリピン国家に実行使で抵抗しようとするアクション映画や犯罪映画はそのわかりやすい例だろう。それ以外の作品では、男たちは物語に姿を見せないか、見せたとしても昼間から近所の雑貨店の前の長椅子に座って酒を飲んでいるだけであり、これは怠惰な遊び人になることで米国が想定する父親像に抵抗しているとも理解できる。また、男性性から自らを解放しようとする映画にはあからさまに父性が登場する。後述するように、フィリピンで「バクラ」と呼ばれるゲイを主役にした映画の多くでは、息子がゲイだと知った父親が息子を折檻して男らしく振舞うよう導こうとし、それを嫌がって息子が家出するところから物語が展開するのが定番となっている。

これらに共通して見られるのは、父親との葛藤とその克服という図式による子の成長という物語の型の不在である。フィリピンの恋愛ドラマでは、進路(職業選択や学業選択・留学)についての親の意向と恋人との2人の関係の間で板ばさみになる構図が多いが、ここでいう「親の意向」とは多くの場合に母親の意向であり、父親は陰が薄いかまたは既に亡くなっていて遺言や遺産相続などを通じて遺志を伝えるという程度でしか関わらない。また、主人公が直面する問題の解決は、自ら働きかけた努力の結果としてではなく、奇跡が起こって問題が解決することが多い。以下ではいくつかの作品を例にとり、そこに見られる父親あるいは父性のイメージを考えてみたい。

2. 規律と思想を伝える父親

2.1. 父親が父性を担う——ウェン・デラマス映画

父親が父性を発揮して息子がそれを乗り越えて成長するという物語は、今日のフィリピン映画ではあまり多く見られない。かつては、農園主の父親が息子に強権的な態度で接し、息子が父に反逆するという『カルナル 愛の不条理』のような作品も見られたが、今日のフィリピン映画でこれに類する構図を見るならば、ウェン・デラマス監督によるバクラ(ゲイ)を主役とする映画(以下、「ウェン・デラマス映画」と総称)が挙げられるだろう。

ウェン・デラマス映画では、主人公が幼少期に自らのゲイ性を自覚して、それに対して父親が「男の子は男らしくしろ」と厳しく躰けようとする場面が繰り返して登場する。

『馬のペトラ』では、父親は息子ピーターがゲイだとわかると頭から水瓶に漬けて心を入れ替えさせようとし、そのためピーターは家を出る。ピーターは富裕な婦人の養子になり、裕福な暮らしを享受するが、婦人の死後に使用人に対して傲慢な態度をとったため、他人に悪感情を抱くと馬のペトラに変身する呪いをかけられてしまう。人前で馬に変身しそうになるたびになんとかごまかしてきたが、再会した父親が発作で倒れ、病院に運ぶ車がない状況で、ピーターは人々が見ている前で馬に変身して馬車を引き、父親を病院に運ぶ。父親の折檻から逃れて別の人生を歩んでいたが、父親の命の危険を前にしてそれまで隠してきた自分の姿を示し、それによって父親の苦境を救って父親に認められる。

『プライベート・ベンジャミン』では、父親は息子ベンジャミンがゲイであることを受け入れているが、軍人で将軍である祖父はベンジャミンを厳しく躰けようとし、軍人の家系にふさわしくないとして家から追い出してしまう。フィリピンに侵攻した外国軍によって祖父が拉致されると、ベンジャミンは祖父を救出するために軍に入隊するが、ゲイであることが知られて軍から追放されてしまう。軍から戻る途中に敵陣を発見してゲイの仲間たちと乗り込み、父親の発明品や仲間の助けを借りて外国軍を追放し、祖父を解放する。この功績によってベンジャミンは祖父に受け入れられる。父親ではなく祖父だが、ここでも、祖父の折檻から逃れて別の人生を歩んでいたベンジャミンが、祖父の命の危険の前に祖父が嫌う自分の姿を示し、それに

よって祖父の苦境を救って祖父に認められるという物語になっている。

2つの作品とも、他の人々と異なる容貌や特徴を持つことを苦にしてそれを隠そうとしていた主人公が、その容貌や特徴の強みを生かして父や祖父を助け、それによって自分の容貌や特徴に自信を持つようになる物語になっている。

2.2. 母親が父性を担う——『彼女についてのすべて』

男性の父親ではなく女性の社長が社員に対して強権的にふるまう作品として、『彼女についてのすべて』がある。

妥協しない態度と強い意思で仕事を厳格かつ的確に進めていく社長ビビアンは、物わかりが悪い部下を嫌い、部下に二度同じ説明をしなければならないことを嫌う。ただし、孤児出身で自分の家庭をもつことを夢見ていた彼女は、路上で見かけた孤児たちには愛情を持った態度で接するのだった。

ある日、ビビアンはステージ3の骨髄癌を患っており、医者から余命が30カ月だと告げられる。優秀な看護師としてジャイカが紹介され、ビビアンは自分の病気と治療のことを誰にも漏らさないことを条件にジャイカを個人看護師として雇う。莫大な報酬で雇われたジャイカは24時間体制でビビアンを看護する。

死ぬ前に会社の従業員用の低価格住宅を作ろうと考えたビビアンは、米国在住で建築家になっていた息子アルバートを会社に招く。しかしアルバートは母親が仕事を優先して自分を蔑ろにしていた過去へのわだかまりから母親に心を開こうとしない。間に入ったジャイカはアルバートにビビアンの病気のことを話してしまう。

ビビアンとジャイカは母親らしさについて意見を闘わせる。ビビアンは自分と息子の関係を思いながら、そしてジャイカは自分と母親の関係を思いながら。ジャイカの母親は外国に働きに出て10年以上も帰ってこないままだった。ビビアンは、「母親はたった一度の過ちでも母親失格なの？ よい母親でなければ母親失格なの？ そんな母親でも母親なのよ…… 私は息子の母親なのよ……」と訴える。これに対してジャイカは、「遠く離れたところに行ってまで私たちのためにお金を稼いでほしいなんて頼んだ覚えはないの。自分のために仕事を選んだのを子どものせいにして」と反論する。

アルバートは、母親が自分や父親よりも仕事を選ん

だことをまだ恨みに思っていたが、そのまま母親と死に別れることは避けたいという気持ちが働き、ビビアンと和解する。ビビアンは心を入れ替え、部下たちに優しくなる。死を前にしたビビアンは、人生の成功は何ではかれると思うかとアルバートに問う。人によっては受賞や、有名になることや、生涯で稼いだ金額かもしれないけれど、私にとっての成功はあなたのような子が得られたことだと告げる。

フィリピン映画、とりわけ上流・中流階級の家庭をとりあげた作品では、息子に対して母親が規範を示すものが多くみられる。父親はあまり登場しないか、登場しても積極的な役割を果たさない。息子は、母親の期待と恋人との関係の間で板ばさみになると母親に従うことを選び、その上で奇跡が起こって恋人とも結ばれる。母親の指示と自分の希望との間で葛藤が生じたとき、その葛藤を乗り越えて息子が一歩成長するという図式は見られない。

3. 父親になること／ならないこと

3.1. 父親の拒否——『I AMERICA』

フィリピンの人々は自分を守り育ててくれる存在としての父親を探し求めている。父親がいたからこそこの世に生を受けたことは確かだが、その父親が常にそばにいて父親としての役割を果たしてくれるとは限らない。また、父親がいたとしても自分の期待通りにふるまってくれるとは限らない。期待通りでないときに父親の存在をどう受け入れるか、あるいは受け入れられないのか。『I AMERICA』では父親への期待が裏切られた子どもたちが描かれている。

マニラでモデルを目指しているエリカがオロンガボ市の実家に帰ると、文字通り肌の色が違う家族に迎ええられる。オロンガボ市はマニラから北西約80kmのバターン半島の付け根に位置する。このエリアにはかつてスービック湾を囲むように米国海軍最大の海外基地があったが、1991年のピナトゥボ火山の噴火を契機に撤退していた。オロンガボ市の基地関連雇用は、基地の直接雇用が4万人、風俗産業関連が1万人と推計されており、米軍撤退でこれらの雇用が失われて大きな社会問題となった。

駐留していた米兵が地元の女性との間にもうけた子たちは、母親が同じなので兄弟姉妹だが、父親が異なるので父親から受け継いだ肌の色も異なる。父親は米国に戻って音信不通になり、子たちは父親のことを

名前しか知らないが、それでも父親の影響は日々の暮らしに直接関わっている。白人系ならモデルになる可能性があるけれど、アフリカ系やヒスパニック系にはモデルの道はほぼ閉ざされている。アフリカ系ならバスケットボールが得意だろうとかヒスパニック系なら歌が得意だろうと外貌で判断され、それに調子を合わせることも必要となる。

エリカたちが暮らす町には、父親に会うため、そして基地が撤退して寂れた街を離れて米国で暮らすため、米国にいる実の父親を探し出そうとする人たちが溢れている。手がかりは母親から教えてもらった父親の名前だけで、それも本名である保証はないが、米国に関わりがありそうな人を見つけるたびに、わずかな可能性にかけて父親の名前を書いた紙を差し出し、父親の手がかりを調べてもらおうとする。

生物学的な父親が米国人であるかないかにかかわらず、今日のフィリピン国民にとって社会的・文化的に米国が「父親」であると見るならば、エリカは現状から抜け出して米国に行けば幸せな暮らしが待っていると夢見る全てのフィリピン人を代表しているし、さらに言えば、そのように夢見る全てのアジア人をも代表している。米国との関係を完全に断つことはできないが、米国に行くにしろ今の場所に留まるにしろ、前に進むには自分の一部分を捨てる大きな決断が必要になる。物語の最後にエリカが発する言葉には、そのような状況に置かれていることを踏まえて前に進む強い意志が表われている。

父親(=米国)への憧れと、父親に守ってもらいたいという願望があるが、現実には米国には手が届かない。そのことを実感した上で、父親を探そうとするのではなく、兄弟姉妹で助け合うことでその場を生き延びようとする。

3.2. 父親になる——『眠らない』

本人に父親になる気があったとしても、父親になるのは簡単ではない。父親になるには何をすればよいのか。そして、男が父親になるのを支えようとする女には何ができるのか。

『眠らない』で、ジェムはマニラのコールセンターで働いている。コールセンター勤務は熟達した技術が必要としない。ジェムの家庭環境や交友関係を見ると、彼女さえ望めばもっと社会的地位の高い仕事に就けそうだし、友人たちや家族はもっといい仕事に転職すればいいのと言うが、彼女はこれで満足していると

言う。

バリーは、ほかにできる仕事がなく、いやいやながらコールセンターに勤めはじめる。ジェムは職場でバリーの教育係になる。2人は住んでいる家が近所どうしで、2人に共通していたのは夜眠れないということだった。そのかわり、2人とも昼間は休憩時間に死んだように眠っている。

ジェムは正式な結婚によらない子であり、男は誰もが不誠実だと考えている。ジェムは既婚男性と不倫関係にある。男と別れて1人で部屋に戻ったジェムは、眠れずに男に電話をかけようとするが、電話はつながらない。コールセンターであらゆる電話に対応しなければならないジェムは、自分がかかる電話はたったの1本も誰にも受け取られない。

バリーには妻と子がいるが、妻は息子を連れて外国に行ってしまった。バリーはジェムに手伝ってもらって息子へのプレゼントのおもちゃを山ほど買い、唯一の手がかりであるカナダの住所に送るが、そこに息子がまだ住んでいるかどうかはわからない。昼間はコールセンターで世界中の人々を繋ぐ仕事をしているけれど、自分のたった1人の息子にプレゼントを届けたと思う気持ちはかなわない。

これはジェムとバリーが結ばれるという話ではない。ジェムは、不倫相手からもらった宝石を売った金をバリーに渡し、バリーはそれによってカナダに息子を探しに行く。不倫相手との縁を切るというジェムの決断が、バリーに息子との再会の可能性を与える。

自ら積極的に働きかけて問題を解決するのではなく、職場の同僚の女性が特に理由もなく大金を貸してくれたために外国にいる息子に会いに行くことが可能になり、それによって父親になれる(かもしれない)。

『I AMERICA』と『眠らない』に共通しているのは、血縁関係や恋愛感情を理由とせず家族のように結びつき支えあうことである。彼らを家族のように結びつけているものは、父子の関係のなかに自分を置きたいという気持ちである。『I AMERICA』では父親を探し求める人たちが家族を形成した。『眠らない』では、父親になりたいという思いの実現を助けようとするので2人が結びついた。フィリピン映画には父親らしい父親はほとんど出てこないが、それは父親が必要ないためではない。守り導いてくれる父親のことは強く求めているし、自分たちもそのような父親になりたいと思っているけれど、現実の社会でそれを実現するのは難しいという思いが映画に繰り返し描かれている。

3.3. 父親を継ぐ——『僕は詩の王様と暮らした』

父と子は、日常的な生活において教え導く関係だけでなく、文化的や精神的なことがらを継承する関係としても現われる。『僕は詩の王様と暮らした』は、ピナツボ火山の噴火によって火山灰に覆われたパンパンガ地方を舞台に、地方語カパンパンガン語による詩作の伝統が国語や英語による教育や経済開発によって失われつつある状況を背景にしている。

詩の王様ダドが各地の文化イベントに積極的に足を運び、話を聞かずに手でスマートフォンをいじっている聴衆に対しても熱意のこもった詩を披露するのは、自分の継承者を育てなければならないという使命感からだろう。齢を重ねた詩の王様には残された時間があまりなく、そのことは本人もわかっていたはずだ。

ダドは高校の文化イベントに呼ばれて送迎役のジェイピーと出会う。ジェイピーは一学年上のティンティンに贈る詩をダドに書いてもらうことにする。フィリピンの求愛では男は女に歌を歌う。高校を卒業して町を出て行ってしまうかもしれないティンティンを繋ぎとめるには、ティンティンが詩を褒めていたダドに詩を書いてもらうのが一番だ。

ダドは、書きかけの詩をジェイピーに見せ、ジェイピーの感想を聞いて詩を修正していく。これまでは詩が完成するまで妻のミディンにすら見せたことがなかったダドが、未完成の詩をジェイピーに見せて書き直している。ミディンはこの様子を驚いた顔で見ている。これはダドがジェイピーに詩を書いてあげているのではなく、詩の書き方をジェイピーに教えているということだ。

ジェイピーは、完成した詩を持ち、ミディンに作ってもらった王冠を戴いて、ティンティンへのプロポーズに向かう。帰ってきたジェイピーは頭に王冠をかぶっている。ティンティンに受け取ってもらえなかったということだ。黙って洗濯を続けるミディンに王冠をかぶせると、ミディンは「私は洗濯女王ね」とおどけて見せる。

ダドに書いてもらった詩はなぜティンティンに効力を発揮しなかったのか。完成した詩しか見せないというダドの詩の王様の力を疑って詩作の途中でジェイピーが口出したからか、それともカパンパンガン語がわからないジェイピーには詩作を受け継ぐ資格がないということか。そのいずれであっても、ダドが詩作の継承を託せるとしたらその候補はジェイピーしかいない。ダドは死の床でジェイピーに詩を渡し、

王冠を授ける。しかし、ジェイピーはダドの葬儀が終わると王冠を脇に置いてしまう。

ダドの詩作は継承されなかったのか。ダドは亡くなる前夜、病院から帰る途中で先住民アエタが経営する雑貨屋に立ち寄り、店主マルリンに詩を詠み聞かせている。ジェイピーはパンパンガ出身だがカパンパンガン語がうまく話せないのに対し、マルリンはアエタだがタガログ語もカパンパンガン語ももうまく話せる。少なくともカパンパンガン語を話すことはマルリンに継承された。

火山灰に覆われて一面の灰になった土地は、中央発の国民文化が地方にも押し寄せてきて、地方の独自文化が覆い隠される状況と重なっている。そのような状況で地方文化を継承するにはどうすればよいのか。その地方で文化を担ってきた人々の系譜に連なる人々が継承できない場合、外部の要素と混じって地元の要素がほとんど失われているか、地元の要素をはじめから持たない越境者や混血者が地元文化を継承することを受け入れるのか。この物語がこの問いへの答えを明示していないことは、フィリピンにおいて父親を継承することの困難さを暗示している。

4. 父親としてふるまう

4.1. 身を挺して家族を守る——『ドッグショー』

『ドッグショー』のラルストン・ジョバー監督は、『もや』の監督のほか、ブリランテ・メンドーサ監督の『フォスター・チャイルド』の脚本などにあたっている。『ドッグショー』は、マニラで犬の大道芸をして生計を立てている人物についてのドキュメンタリーに触発されて制作された作品である。2015年6月のワールドプレミア映画祭で上映され、その後、シネマラヤ映画祭など複数の映画祭で上映されている。

70歳になるセルヒオは、マニラの路上で犬を使った大道芸で生計を立てている。家はなく、市内の共同墓地の一角に寝泊りしている。24歳で発達障害がある娘セリア、高校に通う息子アルビン、稼ぎ頭の2匹の犬（ハバガットとバグウィス）と一緒に暮らしている。セルヒオは食卓でも寝床でも2匹の犬を家族の一員として扱う。食卓にはもう1人分の皿とご飯がいつも用意されている。8歳になる末の息子エディーの分で、セルヒオに愛想を尽かした妻が数カ月前に家を出て行ったときにエディーも連れて行ってしまった。

無許可営業の取り締まりなどにあいながらもセル

ヒオが大道芸を続けているのは、妻の実家に行く交通費をためてエディーを取り戻すためだった。体が悪くなったセルヒオにかわってセリアが大道芸を行って交通費を稼ぎ、セルヒオ、セリア、ハバガットはバスで妻の実家に向かう。

山奥の痩せた土地では、妻の実家にエディーが預けられ、妻はよその地域に働きに出ていた。セルヒオは交渉の末にエディーを引き取ってマニラの家に戻ろうとするが、マニラ行きの1日1便のバスを待っている間にエディーが男たちに連れ去られそうになる。エディーを取り戻すが、その際にかわりにハバガットが車に乗せられて連れ去られそうになる。バスは発車時刻を迎えており、セルヒオたちはハバガットを諦めてバスに乗る。バスの中では、セルヒオ、セリア、エディーの3人が、マニラで待ち受けている生活に不安を抱きながらも、家族が再会できた喜びに満足そうに微笑む。

『ドッグショー』には父親であるセルヒオが登場するが、セルヒオはあまり父親らしくない。家も定職も持たないセルヒオは、家族を養いきれないため、息子を連れた妻に家を出て行かれる。犬の大道芸で生計を立てるが、体を悪くしてそれもできなくなり、かわりに娘が大道芸を行う。家庭としては崩壊しているが、家族の再会に対する思いが強く、子どもたちの助けを借りてその思いをかなえようとする。

ただし、エディーを取り戻すためにセルヒオは大きな努力を払っていない。妻の実家までの旅費を稼いだのは娘だった。妻の実家を訪れたときも、エディーを取り戻すために何らかの犠牲を払ったわけではない。そして、家族同然の扱いで稼ぎ頭でもあったハバガットが連れ去られても為す術がなく、子どもたちを連れてバスに乗ってしまう。

マニラ行きのバスは、いなくなった人をいつまでも追い続けていると前に進めないという人生を象徴しているかのようだ。ただし、マニラに戻れば以前と同様の生活が待っている。むしろ、家族のメンバーは増えたが稼ぎ頭を失っており、以前より厳しい生活になると予想される。このような生活から抜け出せないところが不安定な仕事を続けざるを得ないドッグショー的であり、それにもかかわらず家族愛が深いことが強調される。

『ドッグショー』の最大の謎は、最後に犬のハバガットが連れ去られたにもかかわらず、親子3人が帰りのバスのなかで幸せそうな顔をしていたことである。

そもそもなぜエディーを取り戻す旅にハバガットを連れて行ったのか。ハバガットは、道案内など特に重要な役割を果たしたわけではない。また、セルヒオは高齢で病気がちであり、体が思うように動かず、見た目は父親というより祖父のようである。セルヒオにかわって一家の家計を支えているのは大道芸をするハバガットであり、その意味でハバガットは家父長の役割を果たしているとも言えなくはない。となれば、エディーの家にハバガットが同行したのは家父長としての務めだったからだと理解すべきだろう。エディーの母親側の男たちにハバガットが連れ去られてしまったことで、エディーはセルヒオたちとマニラに戻ることができた。つまり、ハバガットの役割は、自分の身を挺してでも一家が集まるといふ家族の願いをかなえたことだった。父親としてふるまうということは、ときとして家族を支えるために自分が何かを差し出さなければならないこと、父親としての自分の犠牲は必ずしも家族に省みられるとは限らないことを示している。

4.2. 自らの手を汚して父になる——『汝の父を敬え』

『汝の父親を敬え』は、フィリピンでは2015年12月のメトロマニラ映画祭などで上映され、日本では2016年3月に大阪アジア映画祭で上映された。エリック・マッティ監督と脚本のヤマモト・ミチコは『牢獄処刑人』のコンビでもある。ストーリーが予測不能であることがこの作品の魅力の1つだが、以下では物語の結末および核心部分を含めて記述する。

舞台はルソン島北部のバギオ。標高1,500メートルで年中涼しい避暑地で、高原野菜の産地としても知られる。この映画とは直接関係ないが、日本人移民ともゆかりが深い土地で、地元の共同墓地の一角には日本人墓地があり、日本人会有志などによって世話されている。

ジョン・ロイド・クルス演じるエドガーは、教会活動に熱心な妻ケイを寡黙に見守っている。娘エンジェルのことを除けば世事にほとんど関心がない様子のエドガーは、村人たちとさまざまな活動を組織して教会に多額の献金を行うケイと対照的だ。観客は、そんなエドガーの視線を通じて、ケイたちから献金を集める神父たちの拝金主義的ないかがわしさを感じ取る。この教会にはヨシュア教会という名前が与えられているが、教派の違いはおそらくあまり重要ではない。

ケイの父が持ち込んだ投資話に乗ろうと村人たち

から資金を集めるが、その投資話は詐欺で、ケイの父は遺体で見つかり、集めた金も全て失われる。怒った村人たちはエドガーの家に押しかけ、エドガーらに暴行を加え、金目の家財道具を持ち去り、さらにケイとエンジェルを人質にしてエドガーに返金を求める。エドガーは妻がこれまでずっと献金してきた教会に相談に行くが、神父たちは取り合わない。この世に正義はあるのか。

物語の後半でエドガーは故郷の村に戻り、エドガーの過去が明かされる。エドガーが生まれ育った山村では、表向きは鉱物を掘って生計を立てているが、その裏で鉱道掘りの技術を使って銀行強盗を行っていた。村を離れてケイと結婚することで犯罪から手を洗っていたエドガーは、家族を守るためにかつての仲間と協力を求め、再び過去の仕事に手を染める。地下の鉱道を掘り進めて教会が貯め込んでいる献金を強奪し、それをケイの身代金にしようとする。

拉致されたケイを救出するための時間は限られており、雨などの悪条件でも作業を決行する。エドガーたちは慣れた手つきで、しかし厚い壁に阻まれて苦労しながら、ようやく教会の金庫にたどり着く。しかし、金庫を破って現金を奪い、逃げようとしたところで神父たちに見つかって銃撃戦になり、その過程で現金を入れた袋が破れて川に大量の札が浮かぶ。村人からの献金を村人の身を守るために使おうとしているのであり、神父がそれを認めないために強行せざるを得ないのであって、決して自分の利益のために金を盗もうとしているのではないとエドガーが考えているであろうことは理解できるし、映画はこの神父たちを拝金主義的で不正義であるように描いている。だが、たとえそうであっても他人の金を奪うという不正義は許されず、教会が集めた金は川にばら撒かれることで村人たちに返されている。

エドガーは身代金が調達できないままケイの身請けに赴く。村人と銃撃戦の末、傷つきながらも相手を倒し、瀕死のケイを連れてその場を離れるが、ようやく安全なところに逃れてみると、ケイはすでに息絶えていた。

エドガー役のジョン・ロイドは、ラブコメディの大ヒット作品の主演であり、泣く演技で頭目をあらわした。その彼がこの作品でアクション映画のスターが演じるような役柄に挑戦し、しかも取り締まる側ではなく悪漢側を演じていることが驚きをもって受け入れられた。このことは、ラブコメディの世界とアクシ

ョン映画の世界が表裏でつながっていることを暴いて見せた。エドガーは家族を守るために強盗と殺人を犯し、それによって父親になろうとしたが、物語としてはその試みを手放して認めたわけではない。エドガーが教会から奪った金は移送途中で川に落として地元住民に還元され、命がけで救おうとした妻はエドガーの目の前で息をひきとる。エドガーの報われなさは、ときに手を汚す覚悟を引き受けたとしてもその結果が報われるとは限らないフィリピンの現実を冷たく描いている。

むすびにかえて 親よりも恋人を優先？

——『バルセロナ 言い表せない愛』

フィリピン映画では、父親を見つけ、あるいは自分が父親になるのが難しい状況で、父親の存在と関係なく子が自立しようとする試みも見られる。フィリピンのラブコメディでは両親と恋人の間で板ばさみになった主人公が両親を選ぶという物語の型が多く見られるのに対して、両親よりも恋人を選ぶという作品が登場している。

『バルセロナ 言い表せない愛』(以下、『バルセロナ』)では、スペインのバルセロナを舞台に在外フィリピン人どうしが出会う。2年前に恋人セリーンを亡くしたエリーは、建築家になってほしいというセリーンの夢をかなえるため、スペインのバルセロナに留学して建築学を学んでいた。そこでエリーはセリーンに瓜二つの女性ミアに出会う。ミアはフィリピンの両親の期待にこたえるためにスペインに留学したものの、学業が思わしくなくて大学を辞めていた。ミアはエリーのことが好きになり、自分の気持ちをエリーに積極的に伝えるが、エリーはミアに心を開こうとしない。エリーはセリーンへの思いが断ち切れず、また、亡き娘の夢をかなえようとエリーの留学費用を負担しているセリーンの両親(特に母親)からの期待を裏切ることができなかった。

一方で、エリーの母親は、エリーが子どもの頃に1人で家を出てしまい、スペイン人男性と結婚して、バルセロナで経済的に不自由のない暮らしをしていた。エリーは自分を置いて出て行った母親のことが許せないが、母親と和解したいという思いもずっと抱いていた。エリーはアニメ制作が好きで、愛しい人のことをずっと待っていることを描いたアニメ作品を作ったと公開していた。それは母親に対する思いを表現した

ものだったが、アニメ制作ではなく建築家になってほしいというセリーンの希望をいれて、エリーはアニメ制作を心のうちに封印していた。

ミアはエリーのアニメ作品をとて気に入り、エリーにアニメ制作を勧め、エリーは自分が制作した作品を母親に渡すことで母親と和解する。そしてエリーはセリーンの両親に会い、ミアと会っていたためにセリーンの命日に教会に行くのを忘れていたのではないかとセリーンの母親に問われると、それを認め、セリーンの母親を泣かせてしまう。自分の母親ではないとはいえ、元恋人の母親で、しかも自分の留学費用を出してくれているのであるから、自分の母親に相当すると見ることができ、したがってこれは母親の要請と恋人との関係の間で板ばさみになるフィリピン映画の形式に合致している。そうであれば、恋人よりも母親を採り、その上で奇跡が起こって恋人とも結ばれるとなるものと想像される。しかし、『バルセロナ』ではエリーはセリーンの母親を泣かせたままにして、頷くだけのセリーンの父親の消極的な支持を得たうえで、ミアと結ばれる。実際の母親ではないとはいえ、母親と恋人の板ばさみで母親よりも恋人を優先するという選択に限りなく近い物語を描いている。

本稿では、2016年のフィリピン大統領選挙の前後に話題になったフィリピン映画を通じて、そこにあらわれる家父長のイメージを検討してきた。そこに見られたのは、家族をまとめるために父親の役割への期待はあるけれど、強い父親やよき父親は現実存在することが難しく、それにかかわって父親を求める立場を共有する者どうしが助け合う姿だった。この延長上で、『バルセロナ』では、両親(のような存在)がいるにもかかわらず、彼らよりも恋人を優先するかのような物語となっている。このような作品が今後も増えていくのか、それともこの一作で終わるのか、フィリピンのラブコメディにおける両親の位置づけについて引き続き注目していきたい。

本稿で取り上げた映画以外にも、フィリピンにはインディペンデント系を中心にアクション映画や犯罪映画もあり、強い家父長が成功する作品も見られる。一般にフィリピンといえば犯罪のイメージが根強く、フィリピン映画と聞くとアクション映画や犯罪映画を期待する外国の観客がいて、そのため、日本を含む外国の映画祭でフィリピン映画が紹介されるときにはアクション映画や犯罪映画が比較的多く紹介され

るようである。しかし、実際の制作本数や上映頻度や観客動員数などから考えると、アクション映画や犯罪映画の影響力はそれほど大きくない。本稿で挙げた作品のように、フィリピン社会で話題になっても国際映画祭などでは必ずしも上映されない作品を見ることは、フィリピンの人々がどのような物語を必要としており、どのような物語をつくりだしているのかを知る手がかりである。

参考文献

- 樺沢紫苑 2012 『父親はどこへ消えたか——映画で語る現代心理分析』学芸みらい社。
- 日下渉 2016 「フィリピン大統領選挙——なぜ、「家父長の鉄拳」が求められたのか?」『Synodos』(<http://synodos.jp/international/17124>)、2016年5月19日。
- 島田裕巳 2012 『映画は父を殺すためにある——通過儀礼という見方』筑摩書房。
- 山本博之 2016 「脱アメリカ的正義の模索——フィリピンのスーパーヒロイン『ダルナ』」山本博之・篠崎香織編 2016 『たたかうヒロイン——混成アジア映画研究2015』、京都大学地域研究統合情報センター、pp.8-16。
- ルンベラ、シンシア・N & テレシタ・G・マセダ(福永敬編訳) 1985 『フィリピン大衆文化への招待』井村文化事業社。

映画リスト

凡例:邦題 ①原題、②英題、③監督、④制作年、⑤制作国、⑥言語、⑦日本公開

- 『I AMERICA』①I AMERICA、③アイヴァン・アンドリュウ・パヤワル、④2016年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、⑦2016年東京国際映画祭。
- 『馬のペトラ』①Petrang Kabayo、②Peter the Horse、③ウェン・デラマス、④2010年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、⑦未公開。
- 『彼女についてのすべて』①Everything About Her、③ジョイス・ベルナル、④2016年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、⑦未公開。
- 『カルナル 愛の不条理』①Karnal、②Of the Flesh、③マリルー・ディアス=アバヤ、④1984年、⑤フィ

リピン、⑥フィリピン語、⑦アジアフォーカス・福岡国際映画祭 (2001)。

『ドッグショー』 ①Da Dog Show、②The Dog Show、③ラルストン・ジョバー、④2015年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、⑦未公開。

『汝の父を敬え』 ①Honor Thy Father、③エリック・マッティ、④2015年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、英語、⑦大阪アジア映画祭 (2016)。

『バルセロナ 言い表せない愛』 ①Barcelona: A Love Untold、③オリビア・ラマサン、④2016年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、スペイン語、⑦未公開。

『フォスター・チャイルド』 ①Foster Child、③ブリランテ・メンドーサ、④2007年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、英語、⑦東京国際映画祭 (2015)

『プライベート・ベンジャミン』 ①Praybeyt Benjamin、③ウェン・デラマス、④2011年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、⑦沖縄国際映画祭 (2012)。

『僕は詩の王様と暮らした』 ①Ari: My Life with a King、③カルロ・エンシーソ・カトゥ、④2015年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、カパンパンガン語、⑦アジアフォーカス・福岡国際映画祭 (2016年)。

『もや』 ①Hamog、②Haze、③ラルストン・ジョバー (Ralston Jover)、④2015年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、⑦未公開。

『牢獄処刑人』 ①On the Job、③エリック・マッティ、④2013年、⑤フィリピン、⑥フィリピン語、英語、⑦劇場公開 (2014)。